

白楽天『白羽扇』等の受容による『源氏物語』の 「扇」の意味のずれ

黄 建 香

一 はじめに

『源氏物語』に数多く描かれている「扇」を考察する時、檜扇、^{あこめ}栞扇、かわほりなどを含む摺畳扇、つまり今で言う扇子とは異なる用例に気づき、今までの解釈では前後の文意が取りにくいと思ひ、その原因を突き止めようとして、橋姫巻の垣間見の場面の「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」と東屋巻の「楚王の台の上の夜の琴の声」の前に省略された対句「班女が閨の中の秋の扇の色」の二例の意味を問いたいと思う。外国文学の受容による文化差異、時代の変遷、言葉の変化で置きがちな意味のずれが、原文の表裏の意味を正確に把握する邪魔になることは確かである。したがって日本自身のものを外国から借用したものと同位相でとらえては、それが代表する時代性や民族文化が見落とされやすい。

橋姫巻に投影した『白羽扇』及び東屋巻に隠された班婕妤の詠扇詩をはじめ、それ以降の類似の漢詩をも物語に取り込み、原典の意味がどれほど物語作者にとらえられているかに注目しながら、この二つの場面における諸注釈が解明できない疑問を明らかにしたい。どうして扇と琵琶の撥と月が繋がっているのか、またどうして「白き扇」が女の不運をほのめかすのかを明らかにしたいと考える。

物語では扇の用例が全部で35例^①もあり、原文の「扇をひろげたるやうに」（若紫1・二八〇）、「扇を鳴らしたまへば」（若紫1・二九〇）や「扇はか

なううち鳴らして」（若紫1・二九七）、「かはほり」、「扇の端^{つゝ}を折りて」などの表現によって、このデータから考えると平安時代の扇の実物が折り畳みのものであることが分かった。作品において、奈良朝にあったはずの団扇については全く触れなかった。

源氏物語橋姫巻に、秋の月夜に薫が、大君、中君姉妹がそれぞれ琵琶、箏を引くの垣間見する場面に、次のような描写がある。

琵琶を前に置いて、撥を手まさぐりにしつゝみたるに、雲隠れたりつる月の
にはかにいと明かくさし出でたれば、（中君）「扇ならで、これしても月は
まねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげににほひ
やかなるべし
（橋姫巻5・一三一）

また一例、東屋巻に、薫が浮舟に琴を教えるくだりに、

白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはらめ、いと隈なう白うて、なまめ
いたる額髪の間など、いとよく思ひ出でられてあはれなり。（中略）「楚王
の台の上の夜の琴の声」と誦じたまへるも、かの弓をのみ引くあたりになら
ひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従も聞きあたりけり。さるは、扇の
色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、お
くれたるなめるかし。
（東屋6・九二）

の用例がある。

以上の二例では漢籍の引用、特に第二例の引用が物語の主題を大きく左右していると考えられる。はたして「扇ならで」の「扇」と日常に使われている扇、「扇の色」の「扇」と「白き扇」の「扇」とは同種類の物であるのか。引用文の「扇」の働きがよく理解されていないため、その重要性が疎んじられてきたと認めざるをえないであろう。

二 「白羽扇」と橋姫巻の扇

まずは、「扇ならで…」の文は前後の文とのつながりがいささか唐突であると感じられる。前後の文意によって、中君の言葉の中の「これ」は琵琶の撥を

さすことがわかった。この点は諸注釈書でも異議のないところである。それでは、「扇ならで」の文をどう理解すればいいのであろうか。少なくとも「扇ならで、これしても月はまねきつばかりけり」の文は扇と月の間に必然的な関係があることを暗示している。このシーンの焦点は撥にあり、撥で月を招くのを扇で月を招くに入れ替えて理解すべきである。昔、特に物語では扇を差し出して人を招く描写はよくあるけれども、扇で月を招くことは認知されていなかったようである。一つすぐ分かるのは、扇は当然に月を招くことができるということで、そうすると、扇、撥、月の三者の間には詳しく紹介する必要のない常識だと思われるなんらかの関連があるはずである。中君のこの冗談に対して、大君は「入る日をかへす撥こそありけれ、さま異にも思ひおよびたまふ御心かな」とユーモラスに受け取っている。大君の話は『淮南子・覽冥訓』『魯陽以戈回落日』（戈を援いて日をさしまねく）の故事による。「撥」と「戈」の同音を借りて、巧妙に対応しているわけである。

これから中君の言葉に関する諸家の主な注釈を見ていく。これらの注釈から大体以下の二点がまとめられる。第一に、源氏研究者はみな「扇で月を招く」言い方をいろいろな面から考証し、いくつかの見方が提出されているが、いずれも論拠がないため、説得力のある結論が求められなかった。水原抄や原中最秘抄などは漢書から来ていると主張し、花鳥余情は詩歌から来ていると考えているが、それに直接関わる漢書はなかった。

「招き」であるか「学び」であるか、旧説ではまた意見の分かれるところである。河海抄、孟津抄、岷江入楚、それから花鳥余情はみな「招き」を主張し、反対に、水原抄、原中最秘抄、玉小節等は「学び」を支持し、最終的に確定できない状態である。

第二に、湖月抄、集成本、大系本、全集本はともに撥と扇は形が似ているので、扇のかわりに撥でも月を招けると指摘している。さらに、全集本は湖月抄の師説を参考にして、撥が一方へ広がる形つまりコウモリ形が扇子の外形に似ているからと解釈する。この見方は原中最秘抄と矛盾している。原中最秘抄は

当時の扇はまだコウモリ形の折り畳みの扇子ではなく、団扇すなわちだんせん（団扇）のことを言っていると論じる。さらに、班という女性が中国扇の発明者であると指摘している。このように、団扇であるかそれとも扇子であるかまた意見が分かれている。

根本的にことを解決するために、まず対処しなければならないいくつかの問題を整理しておきたい。第一に、ここの撥と扇と月はどういう繋がりがあるのか。第二に、扇と月の関係及び「扇で月を招く」言い方の根拠はどこにあるのか。

まず二番目の疑問から見ていく。「招き」及びそれに近い使い方を考証するために物語の受容可能な漢書や詩歌をほとんど調べて見たが、「新釀桂酒」の「收拾小山蔵社甕、招呼明月到芳樽」（漢詩大観 下巻）という歌ではお酒の樽が月を招くという例が見られる。漢籍の中でも源氏物語にもっとも多く影響を与えた白氏文集には一般の詠扇詩の詩風と違った「白羽扇」という歌がある。

素是自然色、圓因裁製功。颯如松起籟、漂似鶴翻空。盛夏不銷雪、終年無尽風。引秋生手里、蔵月入懷中。塵尾班非疋、蒲葵陋不同。何人称相對、清瘦白須翁。

（素は是れ自然の色、圓は裁製の功に因る。颯として松の籟を起すが如く、颯として鶴の空に翻るに似たり。盛夏にも銷えざる雪、終年尽くこと無き風。秋を引いて手裏に生じ、月を蔵して懷中に入る。塵尾は班にして疋に非ず、蒲葵は陋にして同じからず。何人か相對するに称ふ、清瘦白須の翁。）

漢詩はまず白羽扇が団扇であることを紹介し、それから秋を引きつけ、月を懷に隠し入れる、いきいきとした羽扇を描写し、引き続き人間自身まで詠みこんだ。「白羽扇」が原典になる決め手が「懷中」であって、楽器を弾く人の懷の撥と懷中の白羽扇に対する描きかたがいかにも似ている。月と扇と懷を一首の詩に読み込むのは調べたかぎり「白羽扇」しかなかった。詩の「蔵」についてはすべての日本語訳が「蔵す（かくす）」となっている。「（白羽扇）が

月を蔵して懐中に入る」は即ち月を懐に招き入れたと理解できる。一方、物語では扇の代替品である撥によって隠れた月がさし出てきたので、月を招いたというふうに描くのも自然なことである。思うに、「蔵」の文字を同義の「招」字に入れ替えられた可能性が高いと考えられる。したがって、「蔵月入懐中」は詠扇詩の中では最も物語の原文に忠実なものであろう。これによると、月と扇を一首の歌に読み込む唯一の要因は両方が円形の形にあるという共通性を持つことが分かった。物語の作者が白楽天の歌をよく知っていたことは疑問の余地もない事実で、「招く」は作者が『白羽扇』によって自分の理解を添加して創作したものであろう。作者が典籍を引用するとき、普通は必ず自身の想像と創作を加えたりすることがあろう。

文字の表現上で当該場面の描写が『白羽扇』に最も近いだけでなく、ほのめかす意味も彷彿としている。白翁が自分を白羽扇にたとえ、すこし高潔である品性を賞賛してやまない。「麈尾班非正、蒲葵陋不同」の二句はまさに詩人の品格と人生態度の写実ではないだろうか。白羽扇はこれから次に述べる一般の団扇と女性の悲しい運命を繋げる詠扇詩とは違って、団扇の純白無垢を賛美し尽くす。深山に隠れ住んでいる大君姉妹の品格といかにも相似しているのではないだろうか。というのは、気品があり、世のしがらみからのがれている大君はまだ年若いのに一心に修行し、人生をあきらめているからだ。

よって、垣間見場面の引用部分の扇は団扇であるはずだ。何故かというと物語が受容した漢文化や漢文学にある扇が団扇だったのは中国には摺り畳の扇子がなかったからである。ここでは扇と撥の起源および移り変わりを探る必要がある。まず扇の歴史から見ていこう。一番最初の扇は中国人が発明した団扇で、早くて東漢成帝（紀元前32 - 紀元前7年）の時にすでに使われていた。「怨歌行」という無名氏古楽府一首が団扇の当時の存在をうらづける格好の証拠である。

新製齊紈素、鮮潔如霜雪。裁為合歡扇、団圓如名月。出入君懷袖、動搖微風發。常恐秋節至、涼颺奪炎熱。棄捐篋笥中、恩情中道絕。

(新たに斉の紵素を裂きて、鮮潔なること霜雪のごとし。裁ちて合歡の扇を成るに、团团として名月に似たり。君が懐袖に出入し、動揺して微風ぞ発す。常に恐る秋節の至りて、涼颯の炎熱を奪はんこと。篋笥の中に棄捐てられて、恩情中道に絶えんことを。)

趙飛燕の都入りで寵愛を失ってしまった班婕妤の作とする説もあり、班氏を団扇の創始者とする言い方さえあった。

日本で扇の字を記録した最も早いものは万葉集巻第九雑歌部の「とこしへに夏冬ゆけや皮ころも扇はなたず山に住む人」(現代語訳：夏と冬がいつも一緒か皮ごろもと扇放さぬ山の仙人)であるが、それがおうぎと詠むかうちわと詠むかは知りようがないが、畳める扇ではなく、だんせんであることが、扇子の専門家中村清兄氏に論証されている²⁾。同氏がさらに『扇と扇絵』の著書に、奈良朝には摺畳扇そのものがなく、中国では扇の文字に摺畳扇を意味づけたのは北宋の時代以後のことで、朝鮮では高麗朝以後のことであると綿密に立証し、論述している。扇をおうぎと読んでも折り畳むものではないがあるので、こういう場合、原典に戻して意味を正確に取るべきである。日本古代の扇は中国より伝わったもので、原中最秘抄に出ていた班姫は「班婕妤」のことである。団扇は唐、宋の時代に盛行し、団扇書画まで発達した。が、後の中国書画や中国伝統文化と密接な関係を持つ扇子は一般に9世紀(平安前期)に日本人が初めて作り、しかも11世紀に中国に伝わってきたものと認められている。それによると、少なくともそれまでの中国の詩歌及び文章に出る扇は団扇であるべきなのである。11世紀の初めに生きていた紫式部に影響を与えていたのは11世紀以前の漢文化だと考えられる。だから、原中最秘抄のいうとおりに、橋姫巻の扇は団扇としたほうが史実には合う。

しかしながら、湖月抄及びそれを支持する全集本が「末広形」つまり「コウモリ形」の見方を持つ。湖月抄等は琵琶の撥が真ん中から両端へ広がる形すなわち銀杏の葉状が扇子に似ているところから両者のつながりを判断し、さらに月との関係をこじつける。これも間違いではない。撥と扇の関係をもっとはっ

きりさせるために撥の移り変わりをも見てみよう。関わりのある文章や資料が極めて少ないが、『広辞苑』では撥についてこのように解釈している。「本は四角形、末は次第に薄く、幅広く開いたもの」。『国史大辞典』では「琵琶、三味線などに用いられる日本の撥は、比較的大型であるのが特徴」と解釈する。それらによると、銀杏葉状の撥は昔の方形から進んできたものであることが分かった。撥は下端が方形の棒になり、それより上方に行くに従い幅広く厚さ薄くなり、上端が平た扇形に開いており、この開いた部分を「ひらき」というなど、『日本の楽器』³では撥と扇子の外見での共通点を詳しく指摘している。確かに発達する以前の琵琶の撥は閉じた摺り畳の扇に似ているし、進化した銀杏葉状の撥は開いた摺りたたみの扇に近いし、どちらにしても垣間見の場面では作者は琵琶の撥を摺り畳の、末広の扇に見做したと判断できる。湖月抄などの指摘とは一致している。しかし、原中最秘抄が言う円形の扇も根拠のないことでもない。前者は物語作品の中の実物を指し、後者は引用典籍の中の物をさす。この矛盾は時代のずれと、扇子の発達で団扇が平安時代では日常生活用品までにはならなかったことに起因するだろう。

以上の調査と分析を通じて、まず一つ分かったのは紫式部時代の扇、撥、月の三者の間には共通の特徴はない。橋姫巻の引用部分の扇は畳めない団扇であるべきである。なぜかという、紫式部が受けた漢文化にはまだ扇子は存在していなかったためである。紫式部は中国の詠扇詩の詩意だけを作品に取り込み、扇意の違いには気づいていなかったと考えられる。

明らかに物語作者が琵琶の撥と扇が共通の末広の形をもつことを意識して譬えていると考えられ、末広の外観と満月の円形とはどうしても接点が考えにくい。「以扇招月」の典故がひそかに作者に改竄かいざんされたのだ。

三 班婕妤の詠扇詩と東屋の「白き扇」

琴習いの場面の「扇の色」はつまり日本人尊敬そんぎょうが詠んだ「雪」と題する歌の前句の「班女が閨の中の秋の扇の色」により、同じくだりの浮舟がもてあそぶ

「白き扇」から連想されたものであるけれども、冒頭の分析により、浮舟の手持ちの扇は折り畳みのものであって、班婕妤の白い団扇とは別物にちがいない。日本の史料や和歌には扇と月を繋げる例は極めて少なく、『和漢朗詠集』にわずかにあるものも漢詩を参考にして作られた歌であり、「雪」以外に、『和漢朗詠集』にはそのほかにも美人の不幸を扇に譬えるものがみかけられる。「晩夏」と題するところに「夏はつる扇と秋の白露といづれかまづはおかむとすらん」の一首があって、寂しい一人寝の班婕妤の面影が浮かんでくる。これもまた班婕妤由来の和漢詩である。浮舟が琴を習う場面の季節は晩秋であって、夏の扇が不用になった今頃、浮舟の扇が白でなければならぬのは班婕妤の団扇が白だったからである。白い扇が澄み通る明月を象徴し、これをもって不運の班婕妤を浮舟の身に重ね、女主人公の前途を物語の早い段階で暗示する。

漢詩にも和漢詩にも詠扇詩の現象がある。中国古代の詩歌には団扇を詠むものが大量にあり、大半が班婕妤の伝説と班婕妤作といわれる「怨歌行」をもとに展開したものである。しかも中国では団扇薄命の詩が一つの独特の哀傷詩のジャンルとして詠み継がれてきた。

団扇の持ち主の境遇と裏腹に、歌は団扇の団円、合歡に重点を置き、繰り返して強調するところに、団円と離別を対立させ、美人の悲哀を際立たせる。中秋という時期は一年の中で月が一番明るくて丸い頃でありながら、閨の人が月見をすればするほど無限の孤独を一人で過ごす一番苦しい夜になってしまう。このような風刺手法は中国詠扇詩の踏襲する遣り口である。これが詠扇詩の創作必須条件となり、だからこそ、この場面の「扇」は団扇でなければならない。

合歡扇が明月のごとく丸いことは月と団扇の両者の形の相似から指摘できる。扇が一番多く詠むのは詩であって、調査によると、唐詩の中の詠扇詩数が最も多い。扇と月の同形を詠む詩はほかに古詩「綾扇如圓月、出自機中秦」（綾扇圓月の如く、機中の秦より出づ）等がまず挙げられる。けれども、後の数多くの団扇詩はほとんど班氏の悲運をスタートにして、女性が秋の扇のように捨てられてしまう哀傷的運命を詠嘆することに定着してしまった。それで、団扇は

別名秋扇とも呼ばれていた。人の上に吹く風は我が身にあたる。だから、詠扇詩は逆境中の美人の絶叫とも言える。例えば、王昌齡の「長信秋詞」に「奉掃平明金殿開、且將團扇共徘徊。玉顏不及寒鴉色、猶帶昭陽日影來」とあり、寵愛を失ってから寒さの中で、秋の扇のように捨てられる運命を嘆く班婕妤の境遇を描いている。詩の主人公は秋の扇にも同情を寄せ、使う必要がなくても、時には團扇とともに徘徊する。同じく王昌齡作「西宮秋怨」の「芙蓉不及美人粧、水殿風來珠翠香。却恨含情掩秋扇、空懸明月待君王」（芙蓉及ばず美人の粧い、水殿風來って珠翠香し。却って恨む情を含んで秋扇を掩い、空しく明月を懸けて君王を待ちしを）も同じジャンルのものである。このように女性を秋の扇にたとえて見捨てられた嘆きを詠じるものがたくさん残っている。

ほかに、唐・劉禹錫の「團扇歌」がある。

團扇復團扇、奉君清暑殿。秋風入庭樹、從此不相見。上有乘鸞女、蒼蒼虫網遍。明年入懷袖、別是機中練。

この詩はもっと深刻に「乗鸞女」、「虫網遍」にあるごとく、来年また新しい「團扇」が君王の袖に入ると女の不幸事件が重複することを強調する。唐・司空圖「扇」の「珍重逢秋莫棄捐、依依只仰故人憐」や、江淹「班婕妤詠扇」の「竊愁涼風至、吹我玉階樹。君子恩未卒、零落在中路」（竊かに愁ふ、涼風の至りて、我が玉階の樹を吹き。君子の恩の未だ畢へざるに、零落して中路に在らんかと）等はみな班婕妤をモデルにして、扇にことよせて、人を詠む佳句である。最も早く扇を月に喩えた「怨歌行」も班婕妤が君王に抛棄されることを主題にして、合歡扇、團らん月ではあっても、思慕する人は来ないことを痛烈に諷刺する。「西宮秋怨」では明月と秋扇は対照になっていて、空に照る明月は逆に人に傷心を起こさせ、閨の孤独な夜の情景を照らす。陸放翁「復雨」の「往事已成孤枕夢、故人誰共一樽開。自憐未負年華在、素扇團團月樣裁」や、又た唐の雜曲歌辭である「妾薄命」の中の「團扇起秋風、長門夜月明」や、唐・李咸「婕妤怨」の「不得團圓長近君、月華時泣秋扇」なども團扇と圓月が互いに照応する例である。全部は例を挙げ切れないが、また、李益の「雜曲」の

中の「愛如寒炉火、棄若秋風扇」とか、杜審言の「賦得妾薄命」の中の「自憐春色罷、团扇復迎秋」などもその中に入る。以上のように、中国の古代文化には秋扇、秋月はともに怨みを述べる言葉になっている。秋になって、团扇が涼しい風を送るころには月はいっそう明るく輝く。团扇が不必要になると同時に円月が出る対比関係は中国古典の中では一種の文学手法として成り立った。それは線香花火のような短い男女の情けを描写し、女性のどうしようもない愛情苦を訴える。

物語の二場面の季節も晩秋にあたる。この時の秋の夜、明月、扇などは中国の伝統的詠扇詩の情趣とはぴったり合っているけれども、团扇の薄命観は垣間見の夜の大君姉妹には適用できず、琴習いの節では通常夏の扇とされる白い扇は秋、特に晩秋には相応しくなく、主人公浮舟のほうに当てたのは先例班婕妤の素扇に鑑みたからである。キーワード「白き扇」がすべてを予告し釈明したと思われる。ヒロインがもてあそぶ扇が班婕妤の素扇の境遇に重ねられることは偶然ではなく、「扇の色」の一言語で班婕妤を思い出させ、まだ深慮のない浮舟の近い将来の運命の激変を示唆するヒントとなっている。

浮舟の扇は摺り畳のもので、円形の満月には譬えられないゆえ、合歓、团欒の象徴意義に逆らっており、風刺のコンディションを持つ引用文に出てくる团扇とは明確に違い、美人の瞬く間に失ってしまう幸せを哀れむ意味は直情的には表現されえないが、作者は「扇の色」を持って浮舟の「白き扇」の色を強調し、さらに「扇の色」から「雪」の歌を思い浮かばせ、物語では作者は中国の团扇薄命の詠扇詩のムードをシミュレーションし、キーワードで班婕妤という不運で有名になった歴史人物を提起させ、美人薄命という観念を物語に与えた。薫と出会って、幸福を手に入れたばかりの女の前途に不安を投げかけ、班婕妤らとは変わらぬ今日あって明日のない身の末が残酷に暗示される。しかし、扇子と团扇の違いを重んじないのならば、物語受容者はもちろん、作者自身も中国の詠扇詩の諷諭意味をどれほどまで理解できたのか疑問になる。もっとはっきりいってみれば班婕妤の团扇を見落とせば、そのためにせっかく仕組まれた

「白き扇」の役目も十分に果たせたとはいえないだろう。したがって、団扇薄命詩の表現を模倣した琴習いの場面の扇を団扇に取り替えて理解したほうがもっと適切であろう。

四 結び

物語にわたって、35例の扇の用例の中でただの二例が漢詩と関わりがあり、普通の扇とは区別して、それぞれのシーンにおける正確な意味と価値を考えるべきであると思う。考えてみれば、折り畳みの扇を見慣れていた作者も恐らく団扇の形を想像できなかっただろう。しかし、「白き扇」と「扇の色」の設定によって作者は漢籍の中の詠扇詩の意図を十分分かっていると思われる。団扇薄命の詠風が日本文学ではあまり注目されていなかったのが残念ではあるけれども、このように時代が変遷していても、源氏物語の作者の、目立たない剽窃と模倣によって「怨歌行」らの古詩の生命が日本に移植でき、中国文学史上強い悲的美意識と独特の諷諭性が漢文学を広範囲で包容した源氏物語の表現には注目すべきである。「扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、おくれたるなめるかし。事こそあれ、あやしくも言ひつるかな、と思す」の薫の自嘲的心内にはいかにも詠扇詩の趣が読める。

「扇」の表記と読み方が同じであっても、和漢朗詠集などのものは中国漢詩をもとにつくられたものだが、物語では以上の二箇所が漢詩をもとにして語られたもので、中国漢詩のものとは変化してきている。折り畳めると折り畳めないとの区別、末広と円形の違いだけではなく、満月に譬えると譬えない、さらに男女の行く末が満月のように成就するかしないか、団扇のように合歡するかしないか、さらに女主人公の運命に班婕妤という材料を取り入れるかどうかの違いになる。その肝心の違いは剽窃者紫式部には見過ごされてしまった。其の原因は作者の生きる時代の扇と中国古代の扇の内容が大きく変わったせいである。それで、前後の文意を読み通すには大きな障害が時々ある。このような文字の意味のずれが分かれば作品を読むとき多少役立つと思う。このような借用

は物語によく見られる現象であって、日本文学の一つの独特の方法として捉えるべきであると言える。

ところで、団扇のように作者にとっては想像上の事物になる物の本質を忽略にしたため、文意の繋がりが悪い点も当然に免れない。日本人は自分が発明した扇子には馴染みがありすぎて、外国の団扇に想像力があまり足りなかったせいであろうか、平安時代ではそれまでの奈良時代に既に日本に伝わってきた扇をほとんど受け継いでいなかった。しかし、最も其の時期の日本文化や日本文学にオリジナルの影響を与えたのが唐までの文学であって、中国独特の詠扇現象も例外なくその膨大な詩歌群を持って何らかの形で日本文学に浸透していた。その結果、引用と実物が合わないという現象が起こったのも不自然ではない。

物語作者は日本人の月に対する独特な理解と理念を融和させ、『弄花抄』「扇にたとへたる事あれはかく書り此物語の書様也」のとおり、こういう表現法は作者の創意を加えた物語の特色なのである。これで、私たちが原文を読むときには、分からないからと言ってとばしてしまったり、或いは注解だけで生半可に理解するのではなく、読者が想像を巡らせれば、その内容や文意をもっとよく理解することができるのである。

これで問題とされる二例の扇が原典から剽窃した、中国詠扇詩が隠喩する「美人薄命」を象る団扇の代替品の「あふぎ」であるという結論にたどり着いた。同じ場面に共存する「扇」と舶来品の「扇」を別々に理解し、また統一させる、漢籍が幅広く引用されている物語を読む時、そのような方法も文学作品の一つの読み方ではないであろうか。

【補記】

『源氏物語』の引用は、「日本古典文学全集」（小学館、昭和51年11月）により、その頁数をも掲げた。

【注】

- ①『源氏物語大成 索引篇』（池田亀鑑編、中央公論社、昭和六十年四月）のデータによる。
- ②『扇と扇絵』 日本の美と教養 23、中村清兄、河原書店、昭和44年8月

(3) 『日本の楽器』、田辺尚雄、創思社出版、昭和39年11月

*** 討議要旨**

ニールス・ギェルベルク氏は、資料にある源氏物語の古注釈には天台智の著作（『法華文句』か）が引用されていることからわかるように、ここの解釈は中世的な変容を受けており、もともと紫式部の解釈とは異なっているのではないかと尋ね、発表者は、古注釈はあくまで参考であり、自分で漢籍を広く検索して考察した、と答えた。

クレール＝アキコ・ブリッセ氏は、発表の中で「剽窃」と「借用」とふたつの言い方が出てきたが、その違いは何か、と尋ね、発表者は、特に使い分けていない、作者の意図的なものであるという点では共通している、紫式部は「美人薄命」の含意を知っていたということが言いたかった、と答えた。

神野藤昭氏は、「東屋」の場面の解釈は説得的であったと述べ、「橋姫」の方は、琵琶の撥を収める「隠月」が関わっているが、賀茂真淵の『源氏物語新釈』では、雅楽の蘭陵王の「日をかへす」舞の手を踏まえての発言と理解すべきだという指摘があり、現に蘭陵王では桴をさしあげ、空をみる所作があるところからすれば、団扇でなくともよいのではないかと尋ね、発表者は、それらも含めて考えを深めていきたい、と答えた。